

愛媛大学地域創成研究センター活動報告

— 平成17・18年度（2005年4月～2007年3月） —

1. センター全体の活動概況

2005年度は、センターの初年度である2004年度の活動を引き継いで、重点研究をはじめ、サテライト分室を活用した「まち育てフォーラム」や「mitまちなか大学」の開催、松山市との共同事業として「地域リーダー養成セミナー」の開催などに取り組み、学内の地域貢献組織への助成を行った。2006年度は、センターのメンバーが一部変わったが、従来のセンターの活動に沿った形で、地域の政策や文化に関わる研究を進め、地域づくりへの貢献のための活動や地域との連携のための活動を続けてきた。

2004年度および2005年度の重点研究課題であった「マージナルエリア・四国の再評価と新しい地域像の創成」および「地方分権化時代における地域のアイデンティティ」は、研究会等を積み重ねた上で、『近代愛媛の新群像～愛媛大学蔵「世紀堂文庫」の世界』（2006年1月発行）、『地域文化のアクチュアリティ～愛媛からの発信』（2006年3月発行）、『四国のかたちを考える』（2007年3月発行）にまとめられている。2006年度には、2007年度にかけて新たに「愛媛県南予の地域振興～地場産業とまちづくり」および「地域の文化資源の再開発～その理論と実践」の2つの重点研究課題を設定し、研究に取り組んでいるところである。また、2006年度には、松山市との共同研究として「道州制をめぐる松山市への影響と効果に関する研究」を開始したところである。

地域貢献・地域連携活動の一環として、2005年度には「まち育てフォーラム21」を4回開催した。また、「市民講座」と「アジアの食と文化講座」を「mitまちなか大学」として合計8回開催した。2006年度は、市民向けの講座を中心にして「mitまちなか大学」を6月および7月には各2回、8月以降は毎月1回程度開催し、毎回10数名の市民

の参加を得て、好評を博した。また、2005年度の「まち育てフォーラム」に代わるものとして、2006年度は「GIS講座」を9回開催した。2004～05年度には、松山市との共同事業として「地域リーダー養成セミナー」を継続していたが、2005年度にはこのセミナーを8回開催し、その成果は「みんなでやってみよう～地域コミュニティづくりのすすめ」（2006年3月発行）というまちづくり教本として発行された。その他、2005年度には、地域フォーラム「イームズ・デザイン&地域におけるモダンデザイン」および公開座談会「愛媛の文化は、いまどう？」を開催し、2006年度には、シンポジウム「地域社会における支援ネットワークの現状と課題」を開催するなど、地域社会や文化に関わるシンポジウムにも取り組んだ。「プロムナード・コンサート」については、2005年度に1回、2006年度に3回開催し、毎回多数の市民の参加を得た。2006年度には、これとは別に、「ミニ・コンサート」も開催した。また、2006年度には、松山商業高等学校の「目指せスペシャリスト事業」の取組みに協力することになり、高校生および教職員向けの講話講師の派遣等を斡旋した。

2006年度には、愛媛大学が社会連携への取組みを強化し、四国中央市、今治市、宇和島市などの自治体や伊予銀行、愛媛銀行などの民間企業と連携協定を締結するなど、社会貢献・社会連携に向けた活動が活発化した。これに伴い、四国中央市、今治市、宇和島市にサテライト・オフィスが開設された。「地域がサテライト・オフィスに期待するもの」をメイン・テーマとした「産官学連携シンポジウム」が3市において開催されるなどし、当センターもこれに参加するなど、愛媛大学と地域との連携強化に向けた取組みに協力した。さらに、愛媛大学と愛媛県との連携協定に基づき、大学の南予地域活性化のための取組みに協力することとなったほか、愛媛県との連携事業とし

て「消費者教育講座」を開催した。最後に、2007年2月に株式会社「まちづくり松山」と連携覚え書を交わし、松山市の中心市街地活性化に向けて協力していくこととなり、今後地域社会の発展への貢献の取り組みを一層強化していくこととなったことを記しておく。(宮崎 幹朗)

2. 重点研究活動 (2005年度)

2-1. マージナルエリア・四国の再評価と新しい地域像の創成

マージナルエリアとしての四国という地域を持つ多様な社会文化的資源とその可能性を再評価し、地域の自律のための新しい地域像を創りあげていくことが本研究の目的である。

前年度から引き続き、定期的な公開研究会を5回開催し、各分野の専門の立場からみた四国の現状の把握・事例研究等に基づいて議論を行った。各回の内容は以下の通り(日時・テーマ・報告者(所属)。敬称略。以下同じ)。

2005/09/07 「四国における地域資源を活かした地域活性化ー内子町と上勝町を事例としてー」藤目節夫(センター)

2005/11/07 「カツオの地域資源化と地域活性化~高知県中土佐町の事例をもとに~」若林良和(農学部)

2005/12/01 「都市と農村の交流」野崎賢也(センター)

2006/02/03 「四国における地域経済の現状と課題」湯浅良雄(センター)

2006/03/03 「四国の中小企業と大学との連携」岡本直之(センター)

以上の公開研究会での2年間の議論を反映し各自の研究成果をまとめた書籍『四国のかたちを考えるー四国の再評価と地域創成ー』を2006年度に刊行した。(野崎 賢也)

2-2. 地方分権化時代における地域のアイデンティティ

上記テーマによる研究の第2年目。中央集権的・中央指向的な社会構造の限界を乗り越えるという今日の地方に求められている大きな課題につ

いて、主に文化創造に焦点を当てて、歴史学、文学、芸術学、政治学、社会学、経済学など人文・社会両科学の知識を動員して研究に取り組んだ。メンバーは、以下の3つのチームに分かれて研究を進めた。

2-2-1. グローバリズムと地域のアイデンティティ

第1研究グループ(地域創成原論チーム)では、研究成果として、『地域創成研究年報』第1号(2005年9月)に、以下の4つの論文を発表した。

岡村茂「フランスにおける分権化改革《第二幕》と公選職兼任現象ー地域民主主義のためにー」

林康次「チカーノ、チカーノの人たちの故郷、アストランーニューメキシコのスパングリッシュの響きー」

中西典子「市民的協同と組織間連携にみる地域社会の再構築ー松山市におけるいくつかの実践事例からー」

松野尾裕「21世紀大学都市文化の創成・序論ーあるいは異議申し立ての起点についてー」

05年度の研究会の開催は次の通りである。

2005年7月21日(木曜日)

岡村茂氏「フランス政治の中央・地方構造をめぐってーイヴ・メニイ/岡村茂訳『腐敗と共和制』を中心にー」

2005年12月22日(木曜日)

中西典子氏「地域の組織間連携にみる福祉ガバナンスの可能性ー松山市の実践事例ー」

2006年2月2日(木曜日)

林康次氏「地域アイデンティティと四季ーチカーノの探偵シリーズをめぐってー」

2006年3月23日(木曜日)

松野尾裕氏「The Capability Approachについてー人間への励ましとしての経済の原理を求めてー」(松野尾 裕)

2-2-2. 愛媛の新世紀群像の再構築

第2研究グループは愛媛大学附属図書館所蔵の「世紀堂文庫」についての研究と成果公開を行った。世紀堂文庫は愛媛大学にゆかりある菱田正基(1882-1952)の資料を中心としたもので、日本では従来取り上げられることがなかった、愛媛出身で旅順で活躍した菱田正基という人物について

の研究である。

菱田世紀は下村爲山や内藤鳴雪という正岡子規周辺の文化人を親戚に持ち、安倍能成を友人として、幼い頃より文学に秀でていた。愛媛の師範学校を出て、しばらくして旅順に住み、教員となる。その住居を「世紀堂」と名づけたが、そこには下村爲山、内藤鳴雪という文化人が出入りし、小説のモデルとなるなど旅順における文化サロンの様相を呈していた。

特に『不如帰』で有名な徳富蘆花と正基との交遊についての研究を推進した。蘆花と正基との関係は、正基の父の菱田中行の時までさかのぼる。中行は四国にキリスト教をもたらした人物の一人で、愛媛の今治という場所でキリスト教教会に居た。そこで正基は生まれるのだが、その今治教会に青春時の自分をもてあましていた徳富蘆花がやって来る。蘆花はなぜか今治が気に入る、そこで一年半あまりを過ごす。正基と蘆花のドラマはそこから始まる。後に蘆花は東京に進出し、『不如帰』の大ヒットで一躍有名となる。一方、正基は愛媛を離れ、旅順で生活をするようになる。この時の蘆花は、今治での生活などは忘れてしまったかのようで、蘆花のもとには全国の悩める青少年から手紙がひっきりなしにやってくる状態であった。正基も蘆花に手紙を出した一人であった。正基は戦禍広がる旅順にあって生きる意味を模索していたのであった。

その蘆花が旅順に来た。蘆花は家族を連れて朝鮮から満州を旅するのだが、旅順の駅にも降り立った。そして、そこで出迎えた人物こそ、菱田正基であった。しかし、蘆花はその青年がかつて今治で知り合いであった菱田中行の子息であるとは夢にも思わず、ホテルへの道すがらの雑談でそのことを知った蘆花は大きく驚いた。まさに運命的な再会であったのである。

菱田正基はこの時に蘆花へ粋な贈り物をしている。旅順の地図と、安重根の書、そして「蘆花」をデザイン化したおどろおどろしい髑髏の印である。この髑髏印は蘆花の心を奪い、あちらこちらで蘆花は使用している。この髑髏印の持つ意味は何であったのだろうか。実は、この髑髏印は日露戦争の時に沈んだロシア艦艇の船材を使って正基

自身が彫ったものであったのである。その醜怪きわまる髑髏こそ、キリスト教徒にして反戦主義者の正基が、同じく反戦主義者であった徳富蘆花に訴えたかった戦争の矛盾であろう。そして、両者の根底に流れるものが反戦思想であったことは間違いなく、その両者の運命的な再会がこの中国の地でなされたことに特別の感懐がある。

この蘆花と正基との関係に加え、桜井忠温の絵画や他の文人たちの資料について、研究チームを構成し、研究を推進した。また、愛媛大学と学術交流協定を締結している遼寧師範大学との共同研究をも盛り込んだ。

◎共同研究機関 遼寧師範大学、愛媛大学附属図書館

◎研究スタッフ 奥定一孝(愛媛大学教育学部)・神楽岡幼子(愛媛大学法文学部)・加藤国安(愛媛大学教育学部)・川岡 勉(愛媛大学教育学部)・今野日出晴(愛媛大学教育学部)・佐藤栄作(愛媛大学教育学部)・高橋治郎(愛媛大学教育学部)・中根隆行(愛媛大学法文学部)・東 賢司(愛媛大学教育学部)・福田安典(地域創成研究センター)・矢澤知行(愛媛大学教育学部)

◎成果 『近代愛媛の新群像—愛媛大学蔵「世紀堂文庫」の世界—』(2006年3月、シード書房)

◎主な活動 シンポジウム、研究会、記者会見
(福田 安典)

2-2-3. 地域文化のアクチュアリティ

第3研究グループは「地域文化のアクチュアリティ」を重点研究の主題として研究・資料収集を行い、現時点での成果として『地域文化のアクチュアリティ——愛媛からの発信』(シード書房)を06年3月上梓した。同書は序論と以下の3部からなり、芸術から芸能、サブカルチャーまでも含めた領域的広がりと、過去・現在・未来にまたがる時間軸において、愛媛の文化の特性と本質の解明を目指し、現状の課題認識を深め、今後の更なる展開に寄与しようとするものである。

第一部：愛媛の芸能・演劇

第二部：愛媛の音楽

第三部：愛媛の美術

資料 松山アートスペース, 松山アートマップ, 松山ミュージックマップ

併せて出版記念公開座談会「愛媛の文化は、いまどい？」を第2研究グループと合同で福田安典氏の企画・主導により3月10日に開催した。美術館、ジャズ、能、放送関係の4名のシンポジストと約30名の参加者を学内外から迎え、愛媛の芸能・芸術の現状報告と課題認識、今後の発展への提言をもとに、諸領域間の情報交換、相互理解活動の連携、コラボレーションの可能性等について会場を巻き込んで活発な議論が展開された。

第3研究グループは、芸術・芸能文化は地域の個性や存在感を形成する極めて重要な構成要素であるとの認識を共有している。世界を覆い尽くすグローバリズムの波が各地の芸術・芸能をも取り込み、「普遍」や「メジャー」の旗の下、芸術文化の地域の個性を脱色し続けている事実は確かにある。しかし、一方また、それを受け入れる中で文化レベルの向上と活動の活性化が促され、翻ってそれが地域芸術文化の自発性とエネルギーを高め、個性豊かな芸術・芸能発展へと転換され、愛媛を越えて発信されてゆくダイナミックな循環が認められる。決して直線的な因果には収まりきらない質的変換と化学変化を伴うエネルギー循環の中で真に地方的なものが生まれ、しかもそれは全国的なものでもあるという芸術文化の展開様式が一部に認められるのである。

イームズ展と同時に開催され、美術館開館以来の参加者を集めたシンポジウムをセンターが美術館と共催できたことも特筆すべきことである。

(岸 啓子)

3. 重点研究活動 (2006年度)

3-1. 愛媛県南予の地域振興：地場産業とまちづくり

愛媛県南部地域(南予地域)では、農林水産業などの第一次産業の活力低下、公共事業の減少による建設土木業の縮小、企業の撤退に伴う雇用悪化など、経済の落ち込みが顕著になっている。

本研究グループでは、南予地域の現状と課題を調査・分析し、地場産業の振興策、観光や農業体

験を通じた広範囲な住民交流、高齢化・過疎化の進行する中での地域住民主体のまちづくり、地域に根ざした食育の推進など、地域振興の具体的な方法について提言を行うことを目的に研究を進めている。

2006年度は、8月に南予地域の現地調査・視察を主要なメンバーの参加により共同で実施し、公開研究会を定期的に6回開催した。

2006/08/30-31 南予現地調査・視察, センター教員5名・法文教員2名・農学部教員1名・学生11名, 訪問先: 内子町・八幡浜市・三瓶町・愛南町・宇和島市

2006/08/28 「地域ブランド化の実態について～愛媛の農林水産物・加工品の地域ブランド化にあたって」高橋清幸(えひめ地域政策研究センター), 「愛媛県愛南町における地場産業の経営革新と産官学民による地域産業および地域ブランド化」和田寿博(法文学部), 「愛媛県南予地域活性化特別対策本部の設置と南予地域関連施策の現状」宮崎幹朗(センター)

2006/11/01 「地域活性化の先進地紹介～大分県豊後高田市「昭和の町」」宮崎幹朗(センター), 「南予地域活性化懇話会について」同, 「南予地域づくり事例発表会について」同

2006/11/15 「地域活性化の先進地の紹介と分析～湯布院のまちづくり」湯浅良雄(センター) および大学院生

2006/12/08 「愛南町の産業振興戦略ー水産業とまちづくり」兵頭重徳(愛南町役場)

2007/01/26 「地域に根ざした食育ー愛南町での「ぎょしょく教育」の実践について」野崎賢也(センター) (野崎 賢也)

3-2. 地域の文化資源の再開発：その理論と実践

愛媛は、古来、豊かな自然と文化に恵まれ、また、創造的営為に富んだ幾多の人材を輩出してきた。しかしながら、グローバリズムの急激な進展により、多様だったはずの地域文化の画一化が進み、文化の貧困と枯渇を心配しなければならない事態となっている。愛媛の豊かな文化資源を再開発し、その普遍的価値を共有するにはどうすれば

よいか。その方法と可能性を3つの研究チームにより、理論と実践の両面から、切りひらく。

3-2-1. 多文化共存と地域

第1研究グループ(地域創成原論チーム)では、地域創成の原理論の学際的研究を推進している。第1期(05~06年度)の「グローバリズムと地域のアイデンティティー」の主題のもとに地域が自律的に発展するための条件は何かを探究した研究を引き継ぎ、本プロジェクトでは、特に、地域において異質であることの権利と共存の条件を、政治、法、文芸、福祉、経済などの視点から複眼的に追究する。それによって、地域の固有の価値とは何か、あるいは地域の輝きを失わせている真の要因は何かという問いに迫りたい。

06年度の研究例会の開催は次の通りである。

2006年10月19日(木曜日)

中西典子氏「福祉社会の地域ガバナンスをめぐる予備的考察」

2006年11月16日(木曜日)

岡村茂氏「フランス政治の危機と地域民主主義」

2006年12月16日(日曜日)

林康次氏「アメリカスにおけるローカリズムへの〈語り〉—フォークナーとアナーヤの〈帰郷〉をめぐって—」

(愛媛大学国際比較文化フォーラム主催・地域創成研究センター他共催公開講演会「文学のふるさと」と合同開催)

2007年1月18日(木曜日)

松野尾裕氏「地域の可能性と限界—規範理論的研究の論点整理—」

2007年3月1日(木曜日)

モヴェ・エリック氏「フランスにおける地方のアイデンティティーは存在するのか」

2007年3月8日(木曜日)

横山信二氏「ケベックにおける法の独自性—Common Law systemとCivil Law systemとの衝突—」

2007年4月19日(木曜日)

立川信子氏「フランス第三共和制の時期における古里に関する論争」 (松野尾 裕)

3-2-2. 南予文化再評価のための総合的プロジェクト

一般にはあまり知られてはいないが、南予には一途な情熱で人生を貫いた人々が多い。たとえば、簡野道明は日本の近代漢文教育の父とってよい偉人である。中国という文化大国の理解のためには、国民的な漢文教育が不可欠であるとして、多くの漢文教科書や訳解を作ったほか、『字源』というすぐれた漢和辞典を刊行、今も根強い支持を得ている。

また『鉄道唱歌』で知られる大和田建樹、嵐寛寿郎主役の『鞍馬天狗』、片岡千恵蔵の『宮本武蔵・二刀流開眼』、阪東妻三郎の『王将』、『竜馬がゆく』をベースにした『幕末』などの映画監督伊藤大輔、末広鉄腸やその孫の恭雄というあのお魚博士がいたり、それらに開明学校、平賀源内、高野長英、芭蕉の母、劇場、芸能、和歌なども加わり多彩かつユニークな文化が南予にはある。第2研究グループのプロジェクトは、これらの文化の再発見もしくは発掘を目的として展開するものである。

2006年度の活動としては、まず宇和島を中心に地域の文化を守っておられる方々を含めて研究グループを形成した。その研究グループには、外部から日本映画・映像の第一人者である立命館大学の富田美香氏に参加していただいている。

研究調査では、宇和島で碑文が建立された久保喬、宇和島出身でいまその映画祭が行われている伊藤大輔、八幡浜の芝居についてはほぼその調査が終了している。

今後は研究会を重ね、2008年には研究成果を公開する。

◎共同研究機関 愛媛県立歴史文化博物館、立命館大学、愛媛大学附属図書館

◎研究スタッフ 神楽岡幼子(愛媛大学法文学部)・加藤国安(愛媛大学教育学部)・黒田正幸(宇和島史談会)・今野日出晴(愛媛大学教育学部)・佐藤栄作(愛媛大学教育学部)・富田美香(立命館大学)・中根隆行(愛媛大学法文学部)・中原ゆかり(愛媛大学法文学部)・福田安典(地域創成研究センター)・安永裕美(愛媛県立歴史文化博物館)

(福田 安典)

3-2-3. 愛媛の音楽と美術—地域芸術文化のアクチュアリティ

制作法について、試作をもとに検討した。

(岸 啓子)

第3研究グループ(寿卓三, 千代田憲子, 高安啓介, 岸啓子)は「地域芸術文化のアクチュアリティ」の主題のもとに前年度の研究を選択的に継承し, 特定芸術領域とのかかわりを深化させつつ展開した。活字媒体では捉え切れない音楽と美術の特性から, 資料形態を柔軟に多様化して収集し, あわせて第3研究グループでの美術展・コンサートのDVD資料化を検討した。2006年度愛媛県下で開催された愛媛大学地域創成研究センター主催のコンサートやセンター重点研究メンバーによる自主企画展から数点を選び, それらを美術展主催者, コンサート出演者, メディア・サポート(一部撮影・編集)の許諾や協力を得ながら撮影・編集するとともに, そのDVD資料化と保存について検討し, 『愛媛大学地域創成研究センターDVDライブラリー』として以下の5タイトル計8枚のDVDを試作した。

- ①千代田憲子テキスタイル展
- ②プロムナード企画 アコースティック・ライブ
ジャジー・ポップ・ミュージック
寶村 愛&山下ひとみ
- ③プロムナードコンサート2006 第1回
新作能「子規」解説 宇高通成
- ④プロムナードコンサート2006 第2回
伊予節と都都逸 山田高子
- ⑤プロムナードコンサート2006 第3回
イタリア・オペラの歴史をたどって(演奏会形式) 木村勢津ほか

地域芸術活動の研究では9月6日「愛媛インディーズ・ロックバンドの活動状況——ジャパハリネットの場合」(ジャパハリネット・リーダー鹿島公行), 10月9日「松山の能文化」(宇高通成), 11月20日「愛媛における伊予節の継承と保存」(山田高子), の各課題について, 分野の第一人者と意見交換した。12月25日「美術展・コンサートのDVD化について——資料を越えるために」では, コンサートや展覧会の補助的記録ではなく, DVDそれ自体として楽しむことが可能な, 臨場感を持つ高品質映像・音声の保存・編集法と